
Dropbehind

ziure

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dropbehind

【Nコード】

N0209Z

【作者名】

ziure

【あらすじ】

魔法が存在する世界の物語。魔法に特化する存在『六家』。その六家の中の一つの火神家から生まれた哲也。彼は魔法の力がなく火神家の一人として認められず家を追い出される……そして強くなつた哲也は学園へ足を運ぶ…… 処女作です。駄文です。落ちこぼれからの主人公最強です。誤字・脱字よくあるかもです。それでも良ければぜひ温かい目で見てやってください。R・15、残酷な描写については保険です。

第一話 落ちこぼれ

この世界には魔法が存在する。魔法を使うには才能がいる。その才能は血縁の関係も大きく影響することが長い期間をかけて知られた。

その様々な血縁すなわち家系の中で火・水・土・風・光・闇、各属性ごとに特化する存在がいくつかあった。

それらから5年に1度各属性ごとに能力が高い家系を1家づつ取った存在。

人々はそれらをまとめて『六家^{りくけ}』と称した。

俺はその時『六家』の中の一つだった火に特化した家系 - 火神家

- の長男として生まれた。

名前は哲也^{てつや}。

俺は生まれてからしばらく2つ年上の姉と同年の双子の妹と過ごしていた……

俺が6歳の誕生日を迎える時、魔法の測定を行った。(この世界では6歳から12歳までの間毎年魔法の能力値を測るために様々な測定を行う)

俺の測定結果は普通の人たちと比べても低い結果だった。姉や妹はその測定で飛び出した結果をだしていたのにもかかわらず……

俺は自分が上手く魔法を使えてないのは前から知っていた。

両親や姉、妹からもよく教えてもらってたけど、成果はみられなかった。

でも、姉がいい成績を残していたから、俺にもいい結果が出てくれると少しだけ期待していた。

火神家の長男としていい結果がほしかった。
自分の劣等感から抜け出すためにも、^{すがり}縋りつく結果がほしかった。
この測定は現実が甘くない事を思い知らされた時だった……

そして測定結果が届いた夜の日の出来事??

「哲也、食事が終わったら私の部屋に来なさい。大事な話をする」
俺が、「はい」と返事をした後父は食べ終えた自分の食器を片づけて自分の部屋へと戻っていた。
俺はなんだろうと不思議に思いつつ待たせるのも悪いので残った飯をいつきに腹に入れ込み父の部屋へと向かった。

コンコンと2回ノックをして「入っていいぞ」という声を聞きドアを開く。

俺はそのまま父が座っていたソファアのテーブル越しの向かい側に座る。

それを確認した父は、喉を潤すようにテーブルにあったコーヒーを一口飲んでまじめな顔を向けてきた。

俺にはなんだかその顔、いや雰囲気怖さを感じてしまった。これから言われる言葉が自分の身体にはわかってしているのかのように……

「お前には……この家から、出て行ってもらう」
「え……?どういう、ことですか?」

身体とは違い俺の頭は唐突過ぎて意味が良く理解できていなかった。いや、理解したくなかった。

父はそんな俺に追い打ちをかけるかのように、

「お前にはこの家の名を名乗る資格がない。要するにこの家から出て行ってもらおう。これからは自分の好きな苗字を付けるといい。ただ二度と『火神』とは名乗るなよ。これは餞別だ。話は以上。明日の早朝までに出ていけ」

伝えることを淡々と告げられる父からの言葉は、今までで一番冷たかった。俺は父の雰囲気萎縮されて何もできなかった。

父はそのまま俺にかまわず席から立ち上がり部屋を出て行った。バタンというドアの閉まる音が妙に寂しく部屋に響いた。

数時間後、俺は餞別としてもらったお金を鞆に入れその日のうちに準備をし、夜遅くに誰にも気づかれぬように家を出た。その日の月の光は妙に冷たく感じてしまった。

涙は不思議と頬を伝う事はなかった……

あの日から1ヶ月くらいだろうか……

父からもらったお金もすでに無くなっていった。俺はそこら辺の隅でうずくまって泣いていた。

未だにあの日のショックから抜け出すことはできない。

「おい、その君」

誰かが話しかけてくる。

相手から話しかけてくるなんて久しぶりだ……そんな事を思いつつ俺はゆっくりと顔を上げる。

そこには一人の若い大人の女性がいた。黒目黒髪でこの世界では珍しい容姿だ。顔は見るからに美形。

背はそんなに高くないがプロポーシヨンについては出るところはしっかりと強調されていて誰が見ても綺麗という感想を持つだろう。

「一人で泣いて……何があったの？」

「父に家を追い出されました」

「どうして？」

「僕が弱いから……ただの落ちこぼれだったから……」

「もし行く宛がないんだったら私と来ない？」

「えっ……？」

意味が良く分からなかった。

「私の所に来るかっつて聞いたの。君は弱くも落ちこぼれなんかでもない。私なら絶対君を強くすることができる！君には強くなれる素質がある。そんな君の才能を見抜けないむかつく父を見返してやるために私が鍛えてあげるよ」

俺に素質……？才能……？

しかも今はお金がないし、いる場所もない。これは俺にとってすごい好条件なんじゃないだろうか。

俺はとりあえず聞いてみた。

「付いて行ってもいいんですか？」

「んー……やっぱいいやだ」

「ええっ！？」

驚愕した。

「冗談だよー」

ホツとした。

「ふざけないでくださいよ……」

「ごめん、ごめん。ちなみに名前は楠木香織^{くすのきかおり}。呼び方は……姉さん
って呼んで。むしろそう呼んじやいなさい」

「分かりました。よろしくお願いします、姉さん」

「うん、よろしくね」。それで君の名前はなんて言うの？」

「哲也です」

「苗字は？」

ちよつと考え……そして決めた。

「楠木です」

「そっか、んじゃ行こう哲也」

「どこにですか？」

「強くなるための修行に」

「はい。でも、俺って強くなれるんですか？」

今更ながらの疑問である。さっきも俺に素質あるだの才能だの言っ
てたし……

「もちろん！ただ私の修行にきちんと耐えられれば、ね」

「耐えてみせます。強くなれるならどんなに厳しくても！」

「その調子ならきつと大丈夫よ。改めてよろしくね哲也」

「はい！」

俺はそこから歩き出す……

誰よりも強くなるために……

第一話 落ちこぼれ（後書き）

感想・評価等いただけたらうれしいです。

第二話 姉さん（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

早速お気に入り登録して下さった方、本当にありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第二話 姉さん

あれからしばらく時間がたった……

俺は今15歳になり、背も伸びて身長は170前後。髪は赤色のショートで目は茶色っぽい。顔は姉さん曰く「かっこいいんじゃない？」だそうだ。身体は自分で言うのもなんだが、かなり筋肉は付いていると思う。修業の成果だ。

俺はずっと姉さんこと楠木香織に森の中でずっと鍛えてもらっていた。

まさか一度森に入ってそのままずっと森を出ることなく修行漬けの日々だとは思っていなかった……

そして俺は今、王国に向かって歩いている。どういふ事情かと言われれば、それは昨日の朝に遡さかのぼるのが一番分かりやすいだろう。

.....

いつものように朝食を食べる俺と姉さん。朝食時の団らんといいうちに、他愛もない会話を重ねていく。その中で今日の修行の内容を聞いてみたら、

「今日は私との1対1よ」

「マジ？」

しばらく時間もたってからねえさんとの会話には敬語はほとんど使わないようになった。

俺からすれば本当の姉のようだったし、姉さんは姉さんで敬語を使われるのはあまり好きではないらしいからだ。

それはそれとして俺がなぜ1対1というよくある手合わせの形式の鍛錬内容に一言目で頷かないのかと言うと、力に差がありすぎるからである。姉さんはマジで強い。だから今の俺ではまったく相手にならないと思う。

確かに強い相手との戦いは学ぶことも多いのかもしいが、差がありすぎてはどうなんだろうと考えたからだ。

「マジよ。ルールは……なんでもありでいいか」

そして軽いノリで言われた言葉に俺は冗談抜きでビビる。なんでもありとか俺死ぬかも……

「いやいやいや。よくないから！明らかに絶望という文字が目前に見えるから！せめて少しでもいいからハンデつけてよ！」
だから、必死になってしまつたのかもしれないだよ。

「ちなみに拒否権はなしだし、ハンデもなし。これは私があなただの師として課す最終試験だから。これ食べ終わったら早速始めるからね」

拒否権なしそしてハンデなしという言葉に俺は意気消沈してしまつたが、ともに言われた最終試験という言葉に自分のさっきまでの考えを無理矢理にでも切り替えさせた。

そして朝食を食べ終え、食器を片づけた後外に出た……

「さっきも言つたけどこれは私との修行の最終試験だから、当たり前だけど手を抜くなんて考えないでね」

その言葉を最後に姉さんから感じる殺気によって……俺は自然と身構えた。

「始める前に言っておくけどマジでやるから。死なないように気を付けてね？」

最後の言葉はおどけるような口調で言われただけが、放たれている殺

気が和らぐことはない。

「そういつわけだから、真面目にね。じゃないと……ホントに死ぬよ?」

姉さんから出ている殺気がさらに膨れ上がる。その殺気に震えている自分を自覚しつつ、そんな自分に喝を入れるため頬を両手で一回パンと少し強めに叩き気合いを入れ改めて構える。

「じゃ、始めるよ?このコインが地面に落ちたらスタートね」

「わかった」

姉さんはそのコインを俺に見せてから、親指に乗つけて、弾く。

チンツという音を立ててコインは上に舞い上がり、そして重力により地面へと落ちていく。

そして落ちた瞬間、同時に二人が動き出した……

目を覚ましたら、俺は仰向けに倒れていた。

数分の攻防の後、俺の精一杯の一撃を与えた後は防戦一方となってしまうすぐやられてしまった……

しかし、よくあの一撃が当たったもんだと思う。わざと避けずに受けてくれただけかもしれないが。実際俺の一撃を受けた後、姉さんが満足そうな笑みが見えたような気がするし。

もしそうだとしても一撃を与えたことは嬉しかった。あの姉さんに一撃を与えられたことに。負けたのは悔しいけど……まだまだ自分

には修行が必要だということが分かった。

思考するのをやめ、顔を動かして前を見てみると、姉さんは俺の目の前でニコニコしながらそこに立っていた。

なんなんだ？と思いつながら無理矢理体を起こそうとする。俺が体を起こそうとしている様子を見て姉さんは手を貸してくれる。そして、近くにあった木に背を預けさせて俺を座れさせた後、一呼吸置いて言ってきた。

「合格よ」

「はい？」

いきなり言われた合格という言葉に俺の頭はついていけてなかったため素っ頓狂な返事をしてしまう。

「だから合格よ合格。あなたは私の弟子として最終試験に合格しました」

そんな俺に再度合格という言葉をかけてくる。

「どうも」

こういうときは素直にその言葉を受け取るべきだろうと思ったのでとりあえずは受け取った。

しかしなんとも納得しづらい、というかよく分からない。勝てるとは思ってないけどあんなぼろ負けしたのに合格って……姉さんの基準が分からない。

「なんだよー。もっと喜んでくれて良いのに……まあいいか。というわけで君にはこれから私が指定する魔法学園に行ってもらいます」「はいはい……って、ええっ……！」

適当に相槌をうつっていたら、まさかの展開に驚いた。

「そんなに驚くことじゃないでしょ。学園なんて普通は行くところじゃない」

「それは驚くよ。学園って普通は12歳になったら入るところじゃない。それなのに今までずっと何も言われなかったし、そのまま鍛えてもらって一人前として認めてもらったらギルドとかに登録するかと思ってた」

――魔法学園とは文字通り魔法について詳しく学ぶ場所となっている。世界の状態や歴史についても学んだりする。大体は魔法について学びたい人が入るところで、入学できるのは12歳から。第一部で3年、第二部で3年の計6年間みっちり学ぶ。ちなみに第一部と第二部はエスカレーター制となっていて第一部を卒業すると次の年にはそのまま第二部の一年生として勉学に勤しむギルドについては……簡単に言うとランク付けされている自分に合った仕事の依頼を受け、それをこなすところ。まあ後々出てくるのでその時に詳しく説明しよう。

――「ギルドって言うのも考えたけど、哲也には世間についてもっとよく知ってほしいからね。後は人との交流の楽しさも」

「15歳になって今まで学園に行ってなかった俺が入ってもやっていけるの？てかまず入れるの？」

自分の思ってもな疑問を問いかけてみた。

「入れるよ。試験とか少しあるかもだけどなんとかなるレベルには魔法について教えてるし。もしダメだったとしても私が無理矢理入れるようにするから安心して」

全然安心できないじゃん！というつつこみはなんとか押さえたが、その代わりとでも言うように仮に試験があつたとしても絶対合格してやると言う意思が生まれた。

「姉さんって、そんなに権力ある人なの？」

「さあどうでしょうね。私の素姓なんて探らなくていいから！てな訳で入ってもらうからね」

何が「てな訳で」なのかよく分からないが……

「こんな俺でも大丈夫なの？」

落ちこぼれだった俺は姉さんに鍛えられて強くなったのかもしれない。けど、あらためてそういう環境に行くのは腰が引ける。それに親からの言葉を思い出すとどうしても自分がダメに思えてくる。そう考えるとだんだんと落ち込んでくる……自信が失われていく……

「大丈夫だから魔法学園行きを勧めてるんでしようが！私の弟子と

しての合格をあなたに出したんでしようが！もつと自分に自信を持ちなさい！哲也ならやれるわ！私の、この楠木香織の一番弟子なんだから！」

そんな俺を見かねた姉さんは最初は少し怒ったような、そしてだんだんと元気づけるような口調で言ってきた。俺はうれしく思った。それに一番弟子という言葉が俺の胸にすごい響いた。不思議と自信がこみ上げてくる感じだった。

「そつだよね！俺、行くよ……学園に！！」

「それでこそ我が一番弟子！じゃあ学園に行くための準備をしましよう。明日の朝にはここを出発してもらいますよ」

なぜに丁寧語？と思ったがそれは置いておく。

とうか明日にはここを出発するのか……明日の朝ねえ……

……明日？

「明日！？すごい急じゃん！！」

「しょうがないじゃない、そうしないと哲也が行く学園の第二部の入学式に間に合わなくなるのよ」

「分かった……とりあえず準備してくる」

もし俺が姉さんの最終試験に合格できなかったらどうするつもりだったんだろう……と心の中で考えていたがすぐに考えるのはやめた。背中にある木を上手く使いながら立ち自分の足だけで歩けるくらいに回復したことを確認してフラフラしながらも家へ向かった。

「はいはい、っっているいろと私も準備しないと……！」

姉さんも俺の後を追うように家に向かった。

なんてそうこうしているうちに朝を迎えた……

俺は2階からいつものような足取りで1階に下りて来てテーブルの椅子に座る。

昨日の傷については家に戻った後すぐに治癒魔法で姉さんにほとんど完全に治してもらった。疑問として「なんですぐ治してくれなかったの？」と聞いたら「忘れてた」と言われた。いたずらに舌を出すおまけつきで。

姉さんはテーブルに俺の分と自分の分の朝食を置き自分の椅子に座る。

お互いに手を合わせてから、

「いただきます」

ここでの最後になるかもしれない食事を口いっぱい頬張る俺。そんな俺を見て微笑み自分のペースで食べ始める姉さん。今日は特に会話が生まれない……

しばらく沈黙が続きそんな空気を先に破ったのは姉さんだった。

「はいこれ、私からの入学祝のお金と剣よ。受け取ってね？」

俺が1階に来る前に準備してあったようでそれを取り出して俺に渡してくる。俺はその袋に入っているお金の量に驚く。それにこの剣は姉さんの愛用していた剣……

「まだ入学できるか分からないし。それにどっちにしるこんなに沢山はつけ」

「拒否権はないから、ね」

「分かりました、ありがたく受け取らせてもらいます」

姉さんは目が笑ってない笑顔をこちらに向けた。その笑顔からはある意味ではあの時のさっきよりも恐ろしいかもしれない。ホントに怖くて拒否という行動が出来なくなってしまう……

「それとこれ」

差し出されたのは一枚の封筒

「これは？」

「学校に着いたら学園長室に行つて、これを絶対忘れずに渡してね。そうすればたぶん普通に入れる」

「うん、分かった」

「あとこれ。学園までの地図ね」

「なにからなにまでありがとう」

ホントに心の底から思った感情をそのまま言葉にして伝えた。

「いやいや、一番弟子のためだからね」

姉さんはそう言つて微笑んできた。俺はその微笑みをついじつと見つめたままになつてしまった。

こうやつて改めて見るとホント綺麗な人だと思う。思わず、

「ほら、私に見惚れてないで。そろつと出発しないといけないんじゃない？」

「そ、そうだね」

不覚にも姉さんに見惚れてしまいそうになつてしまった俺は、照れ隠しのように残つた料理をすべて食べきつて椅子から立ち上がった。

「じゃあ、行つてくるね」

「うん、行つてらっしゃい」

別れはともあつさりとしたものだった。

そうして俺は家を出た……魔法学園に向かうために……

.....

という感じだ。つまり俺は今魔法学園に入学するために王国へ向かっている。

しかし王国までの道のりもまだまだ長い。

魔法学園か……不安も多いけどちょっとは楽しみだ。

そんな感情を持ちながら、俺は平原が広がる大地を駆け出した……

第二話 姉さん（後書き）

姉さんとの戦闘シーンをとばしたのはここで主人公の技等を暴露してしまつとすぐにネタギレしちやいそうだったからです。作者のアイディアのなさをお許しください。

治癒魔法などのこの世界での魔法の解説はもう少ししたらやるので今はスルーしておいてください。

重ね重ねすいません。

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

第三話 学園長（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

新たにお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第三話 学園長

俺は今校門の前に立っている。

こうやってじっくり見てみるとなんとというか……めっちゃでかい。

その大きさに俺は圧倒されていた。

お口あんぐりとはこのことなのだろう……そんなことを思いつつ俺はもう一度その学園の校門に書かれているこの学園の名前を改めて確認する。

……王立第六魔法学園……

最低でもこんなのが後五つもこの国にはあるのか……さすがは王国、マジででかい。

まあこれ以上こんな事を考えるのはやめて俺は校門をくぐり学園内へと入っていった……

そして姉さんの言う通りにまずは学園長に会うために学園長室に向かった。いや、向かおうとした。

考えてみれば場所が分からないのだ。下手に探してもこの無駄に広い学園に迷ってしまう可能性も高い。

とりあえずは案内板を見つけるか、この学園関係の人を誰かしら見つけて聞いてみようと思いつつ冷静に周りを見渡したら……すぐ近くそれはあった。

なぜすぐに気付かなかった……と思ったが、俺は自分が思っていた以上に緊張してたことに今ようやく気付いた。

それも仕方がないことだろう。なにせ落ちこぼれだった人間がこんな立派な学園に来て緊張しないわけがないし、そもそも一般的な生徒でもここに入るときには緊張することだろう。

そして俺は緊張の面持ちのまま、そのまま真っすぐに『学園長室』と書かれたプレートがある扉の前に立ちコンコンと二回ノックをして中からの返事を待つ。

中から「どうぞ〜」というなんとも学園長に似合わない（自分のイメージだが）なんともおっとりとしたかわいらしい声が聞こえてきた。もしかしたら秘書とかそういう類かと考えながら、

「失礼します」

と礼儀に反さないようしつかりとした声をかけ、扉を開く。

「どうぞどうぞー。とりあえずそこに座って。それからお話ししましょう？」

さっきの声の主の人だ……この人が学園長なのだろうか……

「はい……わかりました」

いや学園長がこんなにちっちゃくて可愛い人なわけがない。自分の想像だためっちゃ怖い人だと思つてたし……

ちなみにこの人の容姿は、目測だが140あるかどうかぐらいの身長で、体型は……まるで小学生のよう。顔はどう見ても可愛いといわれるだろう。髪型は金髪でツインテール。みんなから可愛がられてそんな雰囲気だ。

俺はこの人がどんな人なのか考え観察しながら、言われた通りにそこにあつたソファアに座る。

そんな視線を感じ取っているのかいないのか、なんともかわいらしいしぐさを見せつけるように俺の向かい側に座る。

「私がこの学園の学園長の佐伯舞^{さへきまい}。見た目はちっちゃいけどちゃんと学園長です。まだこの職について二年目だけどそこら辺は気にしないでおいってください。それでここに来た用件はこの学校に入りたかって事でいいのかしら？」

自分からちっちゃいのはあつさり認めてちゃっかり学園長アピール。つてこの人が学園長なのか……やはりどこから見てもそうは見えない。そんな驚愕の事実（俺からしたら）をあつさりと言われてしまった。

人は自分のイメージからかけ離れすぎているとそれを事実としてうまく受け入れることができないというが、それを身をもって思い知らされてしまった。しかしここで受け入れていかないと先が思いやられるのでなんとかその事実を受け入れ、そしてさっき聞かれた問いに答える。

「はい。僕を育ててくれた人に、ここに来るよう言われてきました。後これどうぞ」

俺は姉さんからもらった封筒を自分の鞆から取り出し学園長に渡す。

「じゃあ、拝見しますね……」

学園長は俺から封筒を受け取りそこから手紙を取り出すしてそれを読み始めた。

さっきの雰囲気から一転して、真剣な眼差しをしている。

沈黙が流れる中数分が経ち、学園長は手紙を読み終えたようでテーブルの上に手紙を置き俺に視線を移す。

「内容は分かりました。実力的に問題なさそうなので第二部からの入学を許可します。試験とかは主に私がめんどくさいので試験とかはなし」

「なんだか学園長にあるまじき発言をしているような……」

「それでいいんですか？」

「あなたが楠木香織に手紙通りの手ほどきをうけたなら問題ないでしょう。別の意味で問題があるかもしれませんが……あ、悪い意味ではないから安心してください。それじゃあ、これからこの学園について説明したいと思いますが構いませんか？」

この人姉さんを知っているっぽい……少し気にはなるが今は聞くところではないと思い、学園長の問いに答える。しかしさっきまでと雰囲気や口調が変わっているなと思った。

「はい。大丈夫です」

俺の返事を聞き、学園長は説明を始めた。

「じゃあ大体は知っていることを前提で話すけど、ここは学園名の通り王国が建てた六つ目の魔法学園です。魔法を使う人たちは、若

「この学生時代が一番伸びる時期と言われています。そのために生徒達が良い環境の下で、生徒同士で切磋琢磨しあつて、成長していく場。そんな環境を作るために建てられました。騎士になるにしても、ギルドに入るにしても魔法は、その人の個人の強さを決めると言つても過言ではないステータスになります。そんなわけでこの学園では、主に魔法の理論や構造を知り、実際に魔法を使つたり、生徒同士の模擬戦を行つたり……要するに魔法を常に軸として教育していきます。でも魔法だけではなく、普通の学校としての教育もしっかりと受けてもらいます。当然友達と仲間とクラスメートと過ごす日々の楽しさなども。要点だけいうとこんな感じですよ。なにか分からないこととか、知りたいこととかないですか？」

「通り決まつたような説明を言つてもらつた。話す姿はさすがいちようは学園長という感じだった。最初の会話でいい加減そうな感じの人かと思つたが、それはあの人の性格上仕方ないこと（それでいいのか？）で学園長としての公と私の区別はしっかりとついているみたいだった。」

それは兎も角、疑問に思つていることがあつたのでそれを聞いてみることにした。

「じゃあ二つほどお願いします。一つは、僕のクラスはどうなるんでしょうか？後もう一つはこつて寮生活って聞いたんですけど……どこにその寮があつてどの部屋に入ればいいんでしょうか？というか今日から使うことは可能なんでしょうか？」

「クラスについては明日職員室に来てもらつてその時にあなたの担任の先生に説明してもらいます。寮の部屋についてはA〜F連ありますがその中のC連の215号室に行つてください。その部屋はすでにあなたの部屋とされています。これがその部屋のルームキーです。なくさないでくださいね？場所については校門を出て、周りを見渡せば6つ寮という感じの建物が並んでいるのですぐに分かると思います」

「分かりました。ご説明ありがとうございます。では失礼します」

今の説明で困ることはとりあえずなさそうだったので、カードキーを受け取り座っていた席から立ち上がり学園長に一礼してそのまま学園長室を後にした……

とりあえず校門を抜けて辺りを見渡すと、明らかに寮という感じのやつが5つほど並んでいるのを見つけたのでそちらを目指して歩き出す。

寮の入口に『C』と大きく書かれた看板がかかっていたのでそこに入った。

そして階段を上り最後の段を上り切り『215』と書かれた自分の部屋を見つげる。

しっかりと横にあるプレートに『楠木哲也』と書かれているので間違いないだろう。

俺は鍵を開けるためカードキーを通しロックを解除して、ドアノブに手をかけ、そして押す。その瞬間……

「てーつちゃん」

とてもとてもかわいらしい学園長が俺の部屋（と思われるが少し心配になってきた）のベットに座りながら俺の名前をしかもあだ名で呼んできたのだった……

第三話 学園長（後書き）

駄文で申し訳ない……

感想・評価して頂けたらうれしいです。

第四話 部屋での会談（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

新たにお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

学園日間ランキングで五位にランクイン！！皆さんに感謝感謝です。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第四話 部屋での会談

ドアノブを引いてドアを開けたその時……

「てーっちゃん」

とベットに座りながら言ってきた学園長に少し困惑する。俺は学園長の方へ歩み寄りながら、疑問をぶつける。

「学園長どうしたんですか？なんでここにいるんですか？てかどうやって俺より早くここに来たんですか？？」

どうやら俺は相当テンパっているようだ。そんな俺の状態を気にすることもなく学園長はマイペースに、その疑問に答える。

「どうしてって言われたら哲ちゃんに会いたかったから。なんでって言われたら哲ちゃんに会いたかったから。どうやってって言われたら哲ちゃんに会いたかったから。それと学園の中以外の時は私のことは舞って名前で呼んで？」

それは疑問に答えているのだろうか？と思うような答えになってない答えを返し、さらには自分のことを名前で呼んで発言……これでもいいのか学園長……！

とりあえず俺は今の答えの意味のわからなさに心の中だけでなく、言葉としてつつこめるだけつつこむ。

「いやいやいや。どれ一つとして答えになってないですよ！特に最後の質問に対しては……！しかもなんで学園長が俺に会いたくなるんですか！？てかなんで学園長のことを名前で呼ばなければならんですか！？学園長はどの生徒に対してもそんなことを要求するんですか……！？」

なんだかつつこみ疲れて倒れてしまいそうだ……しかしそんな俺のものすごい勢いのつつこみに対しても学園長のマイペース加減は崩れることはなかった。いや、むしろ悪化してきて、

「他の生徒にはそんなことさせないよ。哲ちゃんだけ、だよ。だから名前で呼んで？」

と上目遣いで俺のことを見ながらおねだり。

こういうかわいらしい容姿をして華奢な人の上目遣いはどうしても邪険には扱えない存在感というか破壊力が存在する。それは俺にも効果が抜群に発揮されるようだった。ちなみに言っておくが俺は口りのコンではない！……はず。

「分かりましたよ……舞さん」

そう呼んだ瞬間学園長・舞さんはしてやったりというような笑顔をこちらに向けてきた。

きつとこの人は自分の容姿を誰よりも理解しているのだろう。そしてその利用方法も。今それを確信した。

「呼び捨てはさすがに無理があつたか……じゃ改めて、ここに来た理由は聞きたいことと、伝え忘れたことがあつたからなの」
最初にボソツと言った言葉は聞こえなかったことにした。

「聞きたいことですか？」

なんだろうと思う。仮にも学園長なわけだから、少しばかりは俺の個人の情報を知っておきたいということだろうか？口調もさつきまでとはうって変わったように丁寧なものとなっていてるところをみると、興味本意で聞く内容ではないのだろう。

冷静に舞さんが聞きたいこと考えてみるが、分からない。とりあえず俺は「別にいいですよ」と質問を促す。

「うん。じゃあ単刀直入に聞くけど、哲ちゃんって火神家の一人なの？」

その言葉を聞いた瞬間、俺の表情は凍りついてしまったと思う。なぜ知っている？どうして？と頭のなかでは疑問が飛び交っている。口にした訳じゃないが顔に出ってしまったのだろう。付け足すように舞さんは言ってきた。

「これは哲ちゃんが渡してくれた手紙の一文に書いてあったことなの」

「えっ、ってことは……」

「そうよ。これは香織の推測、だったのだけどその様子を見ると推

測は正しかったみたいね。なんでも、哲ちゃんが魔法を使うときの魔力の波動が現火神家主の魔力の波動とほぼ一緒だったんだって。それにそのキレイな赤い髪。他にもいくつか理由が書いてあったけど、言う必要は無さそうね」

俺は舞さんから伝えられなかった言葉に相当な動揺を強いられた。

でも、その言葉を飲み込むことができるとだんだんと姉さんのやさしさを感じ取ることができた。ほとんど確信していただろうに、その事に関して一度も聞いてこなかったやさしさを。

俺は頭の中で整理がついたので、

「そうです。僕は火神家の一人です。正確には一人でした。もう僕は火神家の人間ではありません。それとできたらこの事は内密にお願いしたいんですけど……」

舞さんを信用して正直にそして正確に俺のことについて簡潔に伝えた。口止めをするのも忘れずに。

「詳しいことは……聞かないほうがよさそうね。この件については語らないことを約束します」

俺は舞さんの学園長としての器の大きさに感謝の示しとして「ありがとうございます」とお礼を述べる。

「お礼なんていいのよ。でも困ったわね……この学園ってその火神家の姉妹がいるのよ……」

「えっ、マジですか……」

一体今日何回驚けばいいのだろうか。もう正直疲れてしまったと、ついそんなことを考えてしまう。

「ええ、だからもしかしたらすぐにはれてしまつかもしれないわ……」

別に舞さんが悪いわけではないのに、力になれなくてごめんなさいとでも言うようにすまなそうに言ってきた。

「それはこっちでなんとかするので心配しないでください。それで伝え忘れたことって何ですか？」

俺は今この話を続けてもどちらにとってもあまり良いことにはなら

ないと思い、これでこの話はおしまいと言つようにうち切り、次の話題へと促す。その俺の意志を感じ取つたように舞さんは俺の疑問に答えてくれる。

「あ、その事なんだけどこの学園の第二部の入学式の日程が急に変わっちゃって明日になったのよ。当たり前だけどこの学園の制服持つてないでしょ？だから明日までに制服を用意するから、学園に来たら職員室に行く前にまず学園長室に来て頂戴」

「……はい、分かりました」

なんか姉さんといい、舞さんといい、なんで重要なことを伝えるのがこんなに急になるのだろうか。

と内心呆れながらも頷く。

「じゃ、伝えることも伝えたしもう暗くなってきたから今日はもう帰るね」

『今日は』の所が妙に強調されていたが気にしないでおう。

そう言った後、舞さんは「哲ちゃんおやすみ。また明日ねー」と言い残し部屋を出た。

廊下からスキップのような足音が聞こえた時は思わず顔がにやけてしまった。

舞さんが部屋から出た後、俺はシャワーを浴びてから明日の準備をしてベットに入り横になった。

そしてさっきの会話の中で出た火神家の姉妹について頭の中で思考を巡らせる。

（舞さんに迷惑をかけるわけにはいかないからああは言つたけど、実際ノープランだから……。もし気付かれたらどうしようか……。もし火神家に戻ってきてきてなんて言われたら、俺は……）

俺は長旅で少なからず疲れていたようで思考の途中でいつの間にか瞼の重さに負けて目を閉じてしまい、夢の中へと堕ちていくのだ……

第四話 部屋での会談（後書き）

部活との連立が厳しいために更新速度が少し落ちる事があると思います。

出来る限り1日に1話を更新したいと思いますが、少し不定期になりそうです。

1話完成ごとにすぐ更新するつもりなので、どんなに遅くても3日に1話は更新する予定ですが……本当に申し訳ないと思っています。

感想・評価して頂けると嬉しいです。

第五話 学園生活の始まり（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

新たにお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第五話 学園生活の始まり

俺はまだ日が昇っていないほど朝早くに目を覚ました。

これは入学式前という緊張のせいではなく、毎朝行っている鍛練をするためである。まあ、緊張してないわけではないが。

俺はベットから身体を起こして洗面所で顔を洗い、動きやすい格好をしてカードキーを忘れずに持ってから寮を出た。

鍛練をするにも場所を見つけるのが先決。

あまり見られたいものでもないので一応人気の無さそうなところを探そうと思うが、考えてみればここは今まで修行を行ってきた森の中と違いそんな場所を見つけるのは困難なことだろう。

まだ日も昇ってきていない時間だから人に見られる可能性は低い。そう思い身体をおもいつきり動かすのに支障がない広場を探すことにした。

俺はとりあえず案内板のようなものからその場所を見つけることにした。適当に探して見つけたはいいが迷って帰れなくなりましたなんて笑えないから。

案内板を探すこと数分、無事見つけることができた。『リンデイル広場』と書かれた場所がここから一番近いのでそこに向かうことにした。

そしてリンデイル広場に着いた俺は早速鍛練を始めた……

キレイな赤い髪をした少年。

その少年がリンデイル広場の中心で構えをとっていた。

面白そうなものが見れそうね……早起きもしてみるものだわ……

そして少年は静から動へと移り変わり疾風のように動き出した。

力強そうな拳を振るい、鞭のようにしなやかな蹴りを放つ。

その姿はまるで演武の見本と言ってもいいくらい洗練されたものであった。

その少年の姿について見入ってしまうくらいに。

ここからでは、はつきりとは判断が出来ないがカッコいい顔をしているようにも見える。

あんな少年はこの学園では見たことがない。

いたら確実に見つけることが出来ている。

私があんなに面白そうな存在を見つけれないはずがない。

転校生といったところだろうか？

もし転校生なら第二部の入学式前ということ考えると、一年生の可能性が高いだろう。

いろいろと思考にふけていたせいか、いんべい隠蔽魔法を使っていた油断だろうか、

私はその少年がいつの間にか演武を止めてこちらに視線を向けていることに、

気づくのが少し遅れてしまった。

しかし油断していたとはいえ、気配をほとんど消していたのに……ホントに面白い存在！！

とりあえず私は近いうちにこの少年についていろいろと調べていこうと心に決めて、

その場を静かに離れていった……

.....

俺は鍛錬をしてる最中や戦闘を行うときは妙に感覚が冴えわたるよ
うで、わずかな気配でも感じ取ることができる。

それを感じ取ることができたのでそちらに視線を向けていると数秒
後またすぐに気配は消えた。

一体なんだったのだろうか？もしかしたら気のせいかもしれないが
.....

気にしてもしょうがないと割りきり鍛錬を続けた。

あれから30分ほど動いた後、今日の鍛錬を終わりにした。さすがに汗をかいた格好のまま行くほど神経は図太くない。それに自分が汗臭いまま人と会うのは嫌である。というより相手に嫌われるだろうと思われることは極力したくはない。嫌われて追い出されるのはもうこりこりなのだ……
そんなわけで俺は寮に戻りシャワーを浴び、着替えてから学園へと向かった。

学園の玄関から入りまずは学園長室に向かう。

そしてコンコンとノックをして中から舞さんの返事を聞き、「失礼します」と声をかけて入室する。

舞さんは正面にあるちよつと大きめ（舞さんにとって）の仕事机に座って資料を眺めていた。

俺は舞さんと仕事机越しに向かい合うところまで歩み寄ってから声をかける。

「学園長」

資料の確認に集中していて俺の声に気づかないようで顔を上げない。もう一度声をかけてみる。

「あのー、学園長？」

さすがは学園長といったところだろうか。俺の声に反応しないほど集中している。でもそれでは困るので再度声をかける。

「学園長！」

さっきよりもちよつと大きめの声をかけたのにも関わらず反応がない。ここまで来ると狙っているとしたか思えなくなってくる。もしかして……

「あの、舞さん？」

「なに？」

予想は当たっていたらしく、名前を呼んでようやく顔を上げる。

しかし、その顔は頬をふくらましてちよつと不貞腐れているようだ

った。

そんな子供っぽいしぐさ(そんなことしなくても普通に子供っぽい見えるが)に俺はつい苦笑い。

それが気に入らなかつたのか舞さんはますます頬をふくらまして、「哲ちゃんひどいよ……昨日の夜では普通に名前で呼んでくれたのに、今日になってまた学園長つてよそよそしく呼ぶなんて……」

「いや、だって昨日学園以外では名前で呼んでつて言つてたじゃないですか。だから学園では普通に学園長つて呼ぶと思つて」
なぜこんなところで舞さんは怒つているのだろうか？

「そう言えばそうだっけ？ごめんなさい。じゃあ、私と二人きりの時にも名前で呼んでね！」

「はい……分かりました。それで制服は？」

ここで断るとまたあの上目遣いを使つてくることだろう。俺は素直に了承し、渡されるはずの制服について質問した。

「制服ね……はい、どうぞ」

そう言つて仕事机の引き出しの中から袋に包まれた状態の真新しい制服を取り出して俺に渡してくる。

「ありがとうございます」

俺はそれを受け取り、お礼の言葉を述べる。

「いいのよ。とりあえず早く着替えなさい」

「はい、つてここで着替えるんですか？」

流れで返事をしてしまつたが、ここで着替えるのは抵抗があつた。

「ええ、そうよ」

しかし俺の疑問に当たり前でしょうとでも言うように答える。

舞さんの答え方になんだか抵抗している自分が馬鹿らしくなつてきたので、ありがたく？ここで着替えることにした。

俺は今制服に身を包み急いで入学式の会場となる第一体育館へと向かつている。ちなみに先に職員室に行つてクラスだけは聞いておい

た。

急いでいるのは俺の着替えている途中の姿を見て、いきなり舞さんが暴走してしまい、それを止めるのに時間がかかったせいである。

（あまり思い出したいものではないので省略）

そしてようやく体育館に着いた頃には、すでに大半の生徒が座っていた。

周りの様子を見てみると座る場所は自由なようで、友達同士で座っている者がいれば、一匹狼とでも言うように独りで座っている者がいる。騒いでいる者がいれば、静かに待っている者がいる。

俺はそんな中空いている席に一人で座って入学式が始まるのを待っていた。

時間が少し経ち、まずは渋い男の教頭が開会宣言をして入学式は始まった。

特に変わったこともなく進行していく。

そして学園長の挨拶、すなわち舞さんの出番である。

ステージ上でちっちゃい体を使って身ぶり手振り話す姿は微笑ましく、生徒たちの緊張を解くものであった。

次にステージが上がってきたのは学年首席の女の子。背はそんなに高くないが胸は身長に合ったもので雰囲気は大人っぽく、髪は赤色で肩に掛かるか掛からないくらいのショートカット。顔立ちは整っていて瞳に力強さを感じたのが印象的だった……

その女の子が形式的な言葉で読んでいく姿は、人前に立つのに慣れているようで少しだが威厳さえ感じてしまうものだった。

首席の挨拶が終わり、再び渋い男の教頭が閉会宣言をして入学式は終えた……

そして渋い男の教頭が全体に向けて連絡を伝えてきた。

「これから新入生は自分の所属するクラスに行ってもらいます。クラスの全員が揃い次第担任の紹介と明日以降の予定、連絡をその担任からしてもらいます。それが終わったら解散とします。では各自

自分のクラスに移動してください」

教頭からの連絡を終えた後、俺はとりあえずクラスに向かって足を運ぶのだった。

第五話 学園生活の始まり（後書き）

最近、自分の文才の無さをおもいしっています。

しかも内容がはちゃめちゃになっていくような……

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

第六話 男友達（前書き）

聞いてくださりありがとうございます。

お気に入り登録件数50突破！思わず叫びたくなりました。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第六話 男友達

入学式が終わり渋い男の教頭が全体に向けて連絡を伝える。

「これから新入生は自分の所属するクラスに行ってもらいます。クラスの全員が揃い次第担任の紹介と明日以降の予定、連絡をその担任からしてもらいます。それが終わったら解散とします。では各自自分のクラスに移動してください」

教頭からの連絡を終えた後、この体育館にいた生徒がほぼ一斉に立ち上がり移動を開始する。

こういう人込みはそんなに好きではなく、むしろ苦手だ。正確には慣れていないという方が正しいかもしれない。そんなわけで教室に着くまでで妙に疲れてしまった……

教室に着いた後、前に貼つてある座席表で自分の席を確認して席に向かう。

席に向かっていていただけなのに教室内の生徒から視線（しかも妙に多い）を感じた。そういえば教室に向かっていてる時にも結構な視線を感じたっけ。

その視線をできるだけ意識しないようにして自分の席につき担任が来るまで寝ようと思っただが、その考えはすぐに断ち切られる。

「お前って別の学園からの転校生か？」

と俺の前の席に座っている男子生徒がこちらに体を向けて話しかけてきたからだ。

「えっと……」

「ああ、わるい。俺は晒科利幸たけしかりゆきってんだ。友達はみんな『トシ』って呼ぶからできたらそう呼んでくれ。よろしくな」

男子生徒 - トシは戸惑っている俺に自己紹介をして手を出してきた。

一瞬彼の意図が分からなかったが、すぐに気付いてその手を握って俺も自己紹介をする。

「俺は楠木哲也。呼び方はなんでも構わないよ。こちらこそよろしく」

「おう。で、さっきの質問に戻るんだけど哲也って転校生なのか？」

「正確には違うかもだけど、そんな感じかな」

「ん？どういうことだ？」

俺はこの疑問に答えるかどうか迷う。

きつと俺みたいに15歳まで学園に通ってなくて、しかも第二部からの入学なんて普通はあり得ない。知られば一種の異端児的な存在と受け取る人も出てくるだろう。

「答えづらいなら無理して言わなくていいぞ」

考えているうちに顔に出ていたのかトシはそう言ってきた。

俺はその言葉にありがたく乗せてもらうことにした。

「悪いね。ちよつといろいろとあつてさ。話せるときが来たらそのとき話す」

「わかつたぜ」

気にならない筈がないのにあつさり引き下がってくれたトシに感謝したいと思つた。

「ちよつと聞きたいんだけどさ、さっきからなんだけどこの視線の多さは一体何なの？」

さつきから気になつていた視線について聞いてみた。

「普通に考えれば分かると思つんだが……」

がなんともムカつく答えが返ってきた。

「まるで俺が普通じゃないみたいない方だな」

俺は少し怒つたような雰囲気を作りながら言つた。するとトシは焦つたように、

「勘違いをしないでくれ！そういう意味じゃないから！」
と言つてきた。

「じゃあどういう意味だ？しっかりと説明してくれ」

俺は目が笑つてない笑顔を作つて聞いた。俺の顔を見てまだ焦りが抜けてないがトシは説明を始める。

「えつとだな……哲也つて容姿いいじゃん」

自分ではよく分からないが……

「それで？」

「それに転校生だろ？」

だから何なのだろうが……

「そうだけど、それが？」

俺がそう言つたとトシはなぜ分からないとも言いたげな呆れた顔で、

「まだ分からないのか……」

と言ってきた。俺は真面目に分からないのだが……

「あのさ、普通に考えたらお前みたいに普通にかっこいい転校生がいたら普通は気になるだろ？」

無駄に普通を強調してきた。言いたいことはだいたい納得できたんだが、

「確かにそうかもだけど……容姿だったらトシの方が良くないか？俺がそう言うようにトシは見る限り相当かっこいいと思う。」

茶色の短髪を所々髪を立たせていて、目は茶色っぽい黒で顔立ちがよく整っていると思う。身長は俺と同じくらいで170前後、体型は細くスラツとしていて脚は長い。そんなトシなのだが、

「やっぱりお前は自分の容姿がどれ程良いか理解してなかったか……」

……

そんなことを言ってきた。

いやいや、俺の容姿なんて普通だろう。そう言おうと思ったのだが、担任の先生が来たので会話は自然とそこで途切れてしまった。

先生は「静かにしろ」と言いながら俺らの前に来ると、なんともだるそうに自己紹介を始める。

おかしまとおる

「このクラスの担任になった岡嶋透だ。嫌いなことはめんどくさいこと。よろしく。明日についての連絡だが新入生の歓迎会があるから、今日と同じ時刻、場所に集合しろ。ただ、今日と違ってクラスごとで座ってもらうから間違えるなよ。持ち物は特に何も要らん。」

以上だになにか質問があるやつは……いないな。よし、解散していいぞ」
必要なことだけ述べた担任は解散の言葉と同時に速攻で教室から出た。
ホントにめんどくさいことが嫌な人なんだな……何であの人教師になったのだろうか？そんなことをつい考えてしまった。

「明日どうする？どうせなら一緒に行こうぜ！」

トシは担任の連絡が終わったあと、明日のことについてすぐ俺に聞いてきた。

「いいよ、一緒にいこう」

俺は断る理由は何もないので頷く。

「待ち合わせは校門のところでもいいか？」

「オーケー。それでいいよ。じゃ、また明日校門で」

「おう、また明日な」

そう返事をもらえる友達が早速できたことを嬉しく思った。こんな俺にすぐに話しかけてくれたトシのフレンドリーさに感謝して、俺は教室を出た。

第六話 男友達（後書き）

遅くなったわりに短いという……しかもどう見ても駄文……

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

第七話 再会（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

10000pv突破！読んでくださっている皆さん、本当にありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第七話 再会

朝。

今日も鍛練のために早くに目を覚ます。

いくら毎日やっているとはいえ誰しも眠い時くらいはある。今日はそんな日だったのでとりあえず洗面所で顔を洗う。

冷たい水は俺の意識をほどよく覚醒させた。

準備していたタオルで顔を拭き、着替えて部屋から出てリンディル広場へと向かった。

俺は今リンディル広場に向かっているだが、後ろから気配を感じたので足を止めた。

俺はこの気配に驚きと疑問を持った。驚きはこんな早朝なのに起きている生徒がいたこと。疑問はまるで自分に気付けとでも言うように気配を発しているのにあっちから出向いてこないことだ。

俺はとりあえず気配を感じる後ろに振り返ってみた。

そこには力強い瞳をしたショットカットの赤髪の美少女。入学式の時に挨拶をしていた学年主席がそこに立っていた。しかも振り向いた俺の顔を見て少しうれしそうな顔をしている。

本日二度目のしかも連続の驚きでした。

あちらからは声をかけて来なさそうだったので、俺から話しかけてみた。

「えーと、おはようございます。学年主席さんは朝は早いですね」

「……………」

そう言ったら主席さんは沈黙して（もともとだが）少し複雑そうな顔をした。

「俺ちよつと用事があるんで。さよなら！」

俺はこの沈黙の気まずさに耐えることが出来なくなったのでそう言っただけで右を向いてこの場を去ろうとした。

「ちょっと!」

しかし主席さんが口を開いて俺を呼びとめる。仕方ないのでもう一度回れ右をして振り向いた。

「気付かないの?」

「主席さんでしょ」

俺はそんなの当たり前じゃんとはばかりに答えた。がその答えに主席さんは不服だったようで、

「違うわよ!! ホントに分からないの!?!」

そう言われましても……主席さんと言うことは違ったみたいだし……もしかして自分が美少女と言うことか? そのルックスを褒めてほしいと。違うと思うけどおもしろそ、ではなくて少しの可能性にかけてみて聞いてみた。

「あんたが可愛いということか? それなら見れば分かるぞ」

そう言われた主席さんはだんだんと顔が赤くなっていく。そして顔を真っ赤にした状態で、

「そう言うことを聞いてるんじゃない!! ふざけるのもいい加減にしてよ、哲也」

と言ってきた。俺は不思議に思った。

「あれ? なんで俺の名前を知っているんだ? 名乗った覚えもないしあんたみたいな美少女と知り合いな覚えもないぞ?」

そう、なんで主席さんは俺の名前を知っているんだろうか。

「私はあなたのことをよく知っているのよ」

俺はその答えにひとつの考えが脳裏に浮かぶ。

「もしかして……」

そう言った時主席さんは期待をする視線で俺を見てきた。俺はその期待に、

「ストーリーカーなのか!?!」

答えられそうもない答えを返した。でもゼロじゃないぞ。昨日もこの時間で鍛錬してたら視線を感じたわけだし……まあ当たっている確率は、ほぼゼロだろうけどね。

「そんなわけないでしょ!!」

やはり違っていたらしい。主席さんは一回ため息をついてからボソボソと何かを言いだした。

「ホントは哲也から気付いてほしかったんだけどな……まあ髪型もロングからショートに変えたわけだし、しかも哲也だし仕方ないか……」

「ボソボソと何言ってるんだ。なんか怖いぞ?」

いや冗談抜きでこれがなかなか怖いんだよ。

主席さんは俺の言葉を軽く無視してさつきよりも大きいため息をついてから言ってきた。

「私はあなたの双子の妹の……哲也の妹の^{かがみみか}火神美佳よ」

ん?今なんとおっしゃった?俺に妹なんていたっけ?名前は火神美佳って言ってたけど……火神美佳……かがみみか……かがみ……火神!?

今言われたことが衝撃的すぎて驚きを隠せない。てか実際に驚きすぎて混乱してたし。

それが収まると不思議と、美佳のこと 昔のことを思い出してきた。

確かに言われてみるとその顔には面影があるような気がしてくる。

「本当に美佳なのか?」

いちよう確認のために聞いてみた。

「そうだよ。まさか最後まで気付かないとはね……私は一目見て気付いたっていうのに……さすがは哲也だね」

主席さん 美佳は俺の言葉に頷いてから、俺のことを馬鹿にするように褒めてきた。てか褒めてないね。

「でも一目でよく俺って分かったな」

「そりゃ分るよ。哲也全然変わってないんだもん」

「そうなのか……」

俺は軽く苦笑いをして、美佳は俺に向かって微笑んできた。

「それにしても美佳ってどんな髪型でも可愛いんだな」

「えっ？」

俺が唐突にそう言うと美佳の顔はさっきと同じように赤くなっている。

「だって昔はロングヘアーだったのに今はショートカットじゃん。ロングも可愛いと思ってたけど、ショートもなんというかこうやって見ると似合ってるな」

俺は思ったことを口に出しているが、こんな言葉が違和感なくヒョイヒョイ出てくる自分はいろいろとまずいと思った。案の定美佳は、

「あ、ありがとう……」

と顔を真っ赤にして言っつうつ向いてしまった。

沈黙した気まずい空気（逃げ出したかった……）が続いたが、ようやく落ち着いた美佳は俺に質問してきた。

「なんで出ていったの？」

恐らく美佳が一番聞きたかったことだろう。

「……自分の意志だ」

美佳には悪いが俺は嘘をつくことにした。

「そんなの嘘に決まってる！！」

が瞬間的に否定されてしまった。

「どこに哲也が行ったか父さんに聞いても『勝手に出ていった』とか『あいつの意志だ』とか言ってくるし……でも私はそんなの信じられない！哲也がそんなことするはずがないもの！さあ、本当のことを話して！！」

ここは正直に答えるべきなのだろうか……もう一度考える、悩む、考えて悩む。

「……とうさ、いや……美佳の父さんに出ていくように言われたが、最終的には自分の意志で出ていった……」

そして俺は事実を、起きた出来事が必要な部分だけ言うことにした。

「それって……本当なの？」

俺の言ったことが信じられないのか美佳は困惑しているようだった。

「事実だ」

そんな美佳に構わず俺はきっぱりと答えた。

「そう、なんだ……」

まだ事実を受けきれないようだった。まあこの短時間では無理だろう……

なんだか空気がだんだん悪くなってきたし、聞きたいことがあったのでとりあえず話を変えることにした。

「そういえばさ、なんで俺がこの時間に起きてること知ってたん？」

「えっとね、友達に聞いたの。早朝に赤髪の転校生と思われる男子がリンデイル広場で面白いことしてるってね。それに哲也の顔は入学式に日に見てるし、恐らくそれは哲也かなと思ったの」

「……なるほど」

あんな情報だけでそれが俺って当てるなんて女の勘ってすげえと思っただ。

てかあの時に感じた視線は気のせいじゃなかったのか。

「じゃあ、俺寮戻るわ」

話しているうちに結構時間が経ってしまったので今日は鍛錬をしないことにした。

「また後でね」

「おう、そういえば言い忘れたけど俺が火神家にいたって事誰にも言うなよ」

「姉さんには？」

俺がそう忠告すると美佳はちょっと悲しそうな瞳を向けて聞いてきた。

「もしあっちが俺に気付いたら説明するさ。基本的に言う気はない。だから誰にも言うなよ？」

「でも！？……わかったよ……」

俺が目で訴えかけると美佳はあまり納得はできていないようだったが、渋々と頷いた。

「それじゃ」

「うん」

俺と美佳はお互いに自分の部屋へと戻っていった。

第七話 再会（後書き）

なんか書いた後に思ったが展開が速いような気がする。

指摘されたばかりなのに上手くできない自分が悔しいです……

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

第八話 幼馴染（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第八話 幼馴染

美佳と別れてから俺は寄り道することなく寮に戻った。時計を見ると待ち合わせにはまだまだ早い時間帯だったので、制服に着替えてからベットに寝転がって時間を潰すことにした。そしてさっきのことを振り返っていく。

約九年ぶりに会った妹 - - 美佳はとても可愛かった

髪型がおもいつきり変わっていてビックリしてしまった

美佳との久しぶりの会話は、なんだか楽しかった気がする

美佳は俺と久しぶりに会って、話してどう思ったのだろうか？

俺が出て行ったあの日からどんなことを思い、何を考えたのだろうか？

あの様子だと心配してくれたのだろうか……

そうだったらちょっと嬉しく思う

だが同時に自分に腹が立つてくる

親に出て行けと言われたといえ、何にも言わず、別れを告げずにどこかへ行ってしまった自分に

迷惑をかけまいと勝手に思い込んだ自分に

姉はどうなのだろうか？

美佳があの様子だと、姉はきつと……ひどそうだ

考えると悪寒が何度も背筋に奔るため、そこで思考は終了した。できることなら姉との再会は心の準備がちゃんと出来てからにしてほしいと思った。

再び時計を見ると時間にはまだ余裕が少しあるが、待たせるよりはいいだろうと思い、寝ころがったことにより少し乱れてしまった服を整えてから学園にむかった。

待ち合わせの場所には、すでにトシが待っていた。

壁に背を預けて腕を組み人を待つ姿は妙に似合っていた。

俺はちよつと早足になってトシに近づくと、俺に気付いたようで軽く手を上げて会釈をする。

「よつ、哲也」

「おはよう、トシ。待たせちゃってごめん」

「そんなに待ってないから、気にするな。別に時間に遅れたわけじゃないんだし」

「うん」

「じゃあ、行くか」

会釈を返して待たせたことを詫びると、トシは社交辞令とばかりにそう返してくれた。

そして集合場所に向かうために、並んで歩き始めた。そこに……

「とっ！」

「ぐはぁっ」

掛け声と共にトシに向かって飛び蹴りをかます一つの人影。

その人影は少女だった。髪は黒色で長さはミディアムと言ったところだろう。顔はまだ幼い感じがする。普通よりはかわいい。プロポーションも発展途中のようだった。

その少女から飛び蹴りをくらったトシは、声を上げて見事にふつとんでうつ伏せに倒れている。あ、腰さすってる……痛かっただろう

……

「何しやがる!!!」

当然のように飛び蹴りをかました少女に向かってトシが吠える。

「あははー。痛かった？」

そんなトシをその少女は笑いながら心配？をする。

「当たり前だ!!!」

「そっかー。ごみんね？」

喰ってかかるトシに全く動じる様子もなく軽く謝る。

「ねえ、トシ。この人は誰なの？」

俺はこの少女についてトシに質問を試してみた。

「ああ、こいつはだな」

「はっねあかり初音朱里。それがうちの名前。こいつとはいちようなぜか幼馴染。

よろしくねー、えつとお」

「楠木哲也。よろしくね、初音さん」

「こちらこそ、楠木君」

起き上がりながら説明をしようとしたトシの変わりとはばかりにその少女 朱里は俺に向かって自己紹介してきたので、俺も自己紹介をした。

「それにしても、見事な飛び蹴りだったね……」

「あ、うち褒められちゃった？うれしいなー」

褒めているというか、軽く呆れています。

「誰も褒めてねえよ!!!アホか!?!てかアホだったな……」

トシと意見があった。しかしつつこみの切れが良い。

「もう一発くらいいいのかな？」

「すいませんでしたもういいません」

面白おかしいコントを見て頬が緩んでしまう。

「そろつと行かない？」

しかしこのままだと結構な長さのコントになりそう気がしたので、俺はそう促した。

「おう、行くか」「そうだね、行こっか」

二人はそれに頷いた。

第一体育館は昨日と同じように綺麗に椅子が並んでいた。

違うのはその椅子の数が前の三倍ということだ。こつやってみると相当の生徒の数だ。

まだ時間は早いので生徒の数はそこまで多くない。

「どこ座る？」

俺は二人に問いかける。

「前の方で良いんじゃないか？あえて二年とか三年とかの所に行く必要もないだろう」

「うちもそれに異論ないよ」

「じゃ、座ろっか」

トシは座っている人の姿を見てそう言い、朱里もそれに同意した。

余談だが、この学園は一・二・三年それぞれ学年によって制服に付いている胸のバッチの色が違う。

一年が青、二年が赤、三年が白だ。トシはそのバッチを見て判断したということになる。

そうして俺たち前から三列目のかなり前の方の席に三人で並んで座った。

しばらく時間が経って、歓迎会が始まる時間帯になった。

そこで渋い男の教頭の声が第一体育館に響く。

「後数分で歓迎会を始めたいと思います。立っている生徒は静かに

空いている席についてください。繰り返します……」

生徒たちはその声に反応してどんだん席についていく。

「歓迎会ってなににするんだろうね。うち、楽しみでしょーがない」

朱里が喜々とした表情で言い出した。こういう行事は好きなようだ。

「俺が知るか。無駄にテンション高い。静かにしてろ」

それに対して冷たい雰囲気ですし、朱里を黙らせようとする。

「へえ、うちに対してそういう口きくんだ。さっきの出来事を反省できてないようだね。後でどうなることやら」

だが逆効果なようで、言われた本人は気にもせず、トシに対してそう言った。

言われた後に、トシが冷や汗をかいていたが自業自得だと思い込んで無視することにした。

この二人は完璧に上下関係が出来上がっているようだった。

「それでは今から、歓迎会を始めます」

そう結論づいたところで、渋い教頭が歓迎会の開始を告げた。

第八話 幼馴染（後書き）

新キャラ続々登場します。（たぶん）

しかし相変わらずの駄文……

ご指摘ございましたらコメントしてくださいとありがたいです。

感想・評価してくださいとうれしいです。

第九話 歓迎会（1）（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第九話 歓迎会（1）

「それでは今から、歓迎会を始めます」

まだ少しざわついていているが、それに構わず渋い教頭が歓迎会の開始を告げた。

「伝えるのが遅れましたが、この歓迎会は生徒会のみなさんに司会、進行をやってもらいますのでそこら辺をご了承ください。では生徒会のみなさんお願いします」

渋い教頭はそう言うってから生徒会の一人と司会を交代した。

「みなさん、おはようございます。この歓迎会の司会、進行を務めさせていただきます、生徒会書記の夏目涼華なつめすずかです。よろしくお願いします」

生徒会の書記 夏目涼華は全校に向けて挨拶をしてぺこりと頭を下げた。

美しい仕草にここにいる男子の多くは目を奪われることだろう。

実際に視線が釘付けになっている生徒も少なくない。

「人気高そうだな」

俺は小声で隣に座っているトシに話しかけた。

「ん？ああ、あの人のことか？高そうじゃなくて、ホントに高いぜ」それはそうだろうと思う。

挨拶をしたときの声はとても凜としていて、顔もそれに合っていて美少女というよりは、美人という表現の方が相応しく思う。髪は藍色のセミロング。目付きはちょっとときつく、無表情で無言で見つめられたら少し怖いかもしれない……霧囲気的にはさしずめクールビューティーといった感じだ。

「楠木君ってああいう人が好みなの？」

隣に座っている朱里から疑問が飛んでくる。

ちなみに今の俺らの座っている順番は右から朱里、俺、トシの順である。

俺が真ん中の理由は簡単でお互いがお互いに隣に座りたくないからだそうだ。

「うーん……まあ、幼い感じの人よりは、ああいった大人びた人の方がいいと思ってるかな」

「確かにな。こいつみたいに子供の雰囲気丸出しのうるさくてやかましい奴よりは断然ああいう人の方がいいよな」

俺がそう答えると、トシは朱里を指さしながら俺に同調した。

「トシって反省って言葉知らないんだねー。うちが後でたっぷり反省させてあげるからね。感謝しなさいよ」

やはりというかなんというか、朱里はトシに背後にオーラを漂わせながら睨みつけた。

「あれね、もしかして朱里ちゃんはその書記の人の容姿が羨ましいのかな？」

だが今回のトシはさつきとは違い、そのオーラに負けずに朱里に視線（主に胸）を向けながら言い返す。

トシが言った言葉は朱里にダメージを与えたようで、朱里は顔を下に向けた。

「うう、気にしていることを……後でぶっ殺す」

「え、なんだって？」

隣にいた俺は朱里の言った言葉が最後まで聞こえたが、トシには聞こえなかったらしい。

歓迎会が終わった後、恐ろしいことになりそうだ……

「なんでもない、ない。ほら、真面目にしようよ」

「お前がそれを言うかよ……」

顔を上げてから言った朱里の言葉に憎まれ口をたたくトシ。

俺はその姿に軽く苦笑しながら前を向いて話を聞く体制を整える。

「……それでは、次に我が学園の生徒会長に挨拶をしてもらいましょう。ではお願いします」

「はい」

第一体育館に、一人の女の子の声が響く。

その声を発した生徒会長がステージの上へと移動していく。男女問わずその動きに釣られて視線を動かしている。

「優姉……」

俺は生徒会長を見ながら、隣にいる二人にも気付かれなような声でそう呟いていた。

間違いないあくそこに立っている生徒会長は優姉だろう。

九年前とほとんど変わらない赤い長い髪をひとつにまとめたポニール。きちんとした立ち姿は体型の良さを際立たせる。顔はもちろん美少女の類。それと美佳からの情報からして間違えないだろう。

「みなさん、おはようございます。当学園の生徒会長の火神優奈かがみゆなです。第一部から第二部に上がってきた生徒のみなさん、それと例年より多い他校から来た生徒のみなさん、試験の合格と第二部の入学おめでとうございます」

それにしても相変わらず綺麗な声をしているなと思う。余談だが優姉は歌がめっちゃめっちゃ上手かった。

「私たち第二部の在校生は、皆さんがこの学園に来ることを、とても楽しみにしていました。生徒会長の私も当然その中の一人です」
「どンドンと台詞を述べていく優姉は生徒会長にふさわしい堂々としたものだった。」

「私たち在校生よりも、学園長が特に新生を楽しみにしていて、前日の時にすれ違った時のあの姿は、まるで子供のようでした」

そのまんまじゃん、と思っってしまった俺には罪ではないはずである。優姉の言葉に笑っている生徒も少なくないし。

「そんなわけで私たち第二部の生徒、先生はあなたたちを歓迎します。短いですがこれで私からの挨拶を終わりにしたいと思います」
「そう言っつて、ペこりとお辞儀する。顔を上げる瞬間、俺に向かってニヤリと笑みを見せてきたことは、気のせいであってほしい……
そして優姉はそのままステージから下りていった。」

「会長、ありがとうございます。つづいて、新入生と在校生の親睦を深めるためのゲームに移りたいと思います。説明は副会長お願

いします」

副会長と思われる男子は、すつと立ちあがる。

「生徒会副会長の野田信二だ。のだしんじよろしく。では早速今から行うゲームの説明を始めたいと思う。ルールはかなりシンプルだ。まずはじめに各学年最低一人ずつ入ったグループを作る。ただし人数は最高でも十人とする。そしてグループが出来たらこの学園の様々なところに貼つてある紙に書かれた課題や問題を探し、それをクリアしてもらう。説明は以上だ。ちなみにクリアした数が一番多かったグループには会長からプレゼントがある。ほしければ頑張ることだな。それではグループを作り始める。できたグループから紙を探し始めても構わない」

その言葉がきつかけとなり、ゲームが始まった……

第九話 歓迎会（1）（後書き）

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

第十話 歓迎会(2) (前書き)

開いてくださりありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第十話 歓迎会(2)

「グループを作り始める。できたグループから紙を探し始めてもかまわない」

副会長のその言葉がきっかけでここにいる生徒が動き始める。

「俺らも動くか」

俺は立ちあがってから二人を呼びかける。

「そうだな、二・三年捕まえて早く紙を探すか」

トシはそう言って動き出そうとした。しかし朱里が「ねえねえ」と面白いことでも思いついたようで、動き出そうとした所を弾んだ声で引きとめて提案してきた。

「このゲームを利用してこの三人で勝負しない？」

「は？」「どういうこと？」

トシは意味が分からないという様子だ。俺もよく意味が分からないがとりあえず朱里の提案の意図を聞いた。

「どういうことって言われてもそのままだよ。この三人で勝負するんだよ。そっちの方がもっと面白くなりそうじゃん。勝負するならやっぱり罰ゲームが必要よね……一位の人が他の二人に何か命令を下せるって言うのはどう？」

と言ってトシに挑発するような目を向ける。

「…おもしろえ。いいぜ、やるうぜ」

挑発に簡単に乗ってしまうトシの図が完成………どんだけ単純なんだろう。

とはいっても俺もこういう勝負事は嫌いじゃないから頷いて同意を示す。

「クリアの数が多い人が勝ちでいいよね？」

「いいぜ」「いいよ」

俺とトシは再び頷いて、みんながそれぞれの方向に動き出した……

(さて、どうしようか……)

俺は心の中で呟く。この学園の先輩との交友関係が少なからずあるあの2人は、俺よりはやりやすいことだろう。正直あんまり知らない人に声をかけるのは得意ではない。ということ、歩きまわって声をかけられるのを待つことに。と決定した瞬間に、後ろから声がかかる。

「哲也じゃない。一人なの？」

「美佳か、それと……」

振り返ると、そこには美佳と見知らぬ一人の女子生徒がいた。胸を見てみると赤色のバッチを付けていた。

「どうも、はじめまして。美佳の友達の朝瀬川美月あさせがわみずきっていうの。よろしくね。よかつたら私たちとグループ組まない？」

「別にいいですよ」

断る理由もない……わけでもないけど、せっかく誘われたんだからということ朝瀬川さんからの提案に頷いた。

そしてそこにさらなる人影がこちらに来た。

「美佳が男の子と一緒にいるなんて珍しいわね」

「…もしかして彼氏？」

「そういうのじゃないですよ！お姉ちゃんならともかく涼香さんまでそういうこと言わないでください」

一人は生徒会長で、もう一人は生徒会の書記の人だった。てかあんなこと言ってるけど、優姉って俺に気付いてないのか？そうなるにあの意味ありげな視線は何だったのだろうか？

「ともかくってことは私は美佳に対していつでもそういうこと言ってもいいの？」

「よくないに決まってるでしょ！」

「なーんだ、つまんないの」

俺の思考とは関係なく、見事な姉妹での漫才が始まる。この二人は姉妹として仲が良かったから、これがお互いにからかいということ

を分かっている。だから本気で怒ることはないので心配はいらないだろう。

「ホントあなたたち姉妹は仲がいいわね」

漫才中の姉妹に、夏目さんが少し呆れたような感じで、俺の思っていたことを口にする。

「そうかしら」

まんざらでもなくうれしそうにする優姉。

「そういえば生徒会長と書記の方々が、こんなところに話しに来てて大丈夫なんですか？」

俺は優姉に問いかける。

「大丈夫も何も、私たちも参加するのだけど」

「そうなの!？」「そうなんですか!？」

何を言っているのかしら、とでもいうように、小首をかしげながら答える優姉に、驚きを隠せない俺と美佳。てか妹にそういうのって伝えないものなんだ……

「そんなに驚くこと?ちなみに私と涼香がこっちに来たのはあなたたちのグループに混ぜてもらったためよ。入ってもいいかしら？」

姉妹そろって同じグループになってしまつとは、俺は運がないのだろうか……

「構わないですよ」

「会長にそう言われたら拒否するわけにはいかないですね」

「お姉ちゃんの場合、拒否したとしても、結局無理矢理入るんだろうけどね」

俺は素直に頷き、朝瀬川さんは皮肉を言うように答えて、美佳がしようがないとも言いたげな口調でそう言った。

「じゃあよろしくね。これで各学年一人ずつ集まったことだし探しにいきましようか」

ここにいる全員が優姉の言葉に頷いた。

第一体育館を出て俺らは目的地も決めずに適当に歩く。

これは朝瀬川さんの提案で『真面目に探すのもめんどくさいし、適当に歩いて見つけたものを解けば良くない』という発言によるものだ。なんとも適当な考えだがここにいる人たちはそれに反対するとはなかった。

「紙、ありましたよ」

周りに紙があるか探しながら歩くこと数分、俺は文字が書かれていた紙を見つけた。

「え？……あ、ホントだ。言われなきゃ見過ごすところだった……」
美佳は紙を見つけられてなかったことに少し落ち込んでいる様子だった。

「これは……闇系の隠蔽魔法が掛かっていますね。しかも注意しても気付かないこともあるくらい強さで。私も言われてやっと気付きましたし、そう落ち込むこともないと思いますよ」

意外でもないけどしつかり心配りができるようで、夏目さんがそう言って美佳を励ました。

「それにしても楠木君、よくこの紙に気付いたね」

興味深そうに朝瀬川さんが言ってきた。

「なんとというか……微量でしたけど魔力を感じたので、そこを視たらありました」

「へえ〜。すごいね」

朝瀬川さんはそう言って面白いものを見るような目線を俺に向けてきた。てか『も』ってなんなんだ？

「そういう朝瀬川さんも紙にちゃんと気付いてたんじゃないですか？」

「いちようね。まあここは一年生の顔を立てるのもいいでしょ。それじゃあ楠木君、問題を確認してみて」

「分かりました」

紙には……

問題その21『この学園の生徒（第二部のみ）の数は何人でしょうか？A - 6 2 3、B - 6 1 1、C - 6 5 2』
と書いてあった。

俺は書いてあったことをみんなに伝えたと優姉が、

「会長である私にとってこんな問題は答えられて当然！答えはAよ！」

「さすが会長ですね……」

ノリノリで答える優姉に俺は苦笑しながら言った。

この問題を作った人は会長を対象とすることを考えてはいなかったのだろう。

俺らが見つけた問題は、学園のことに関することばっかで、俺らのグループは優姉が全問すべてを正解していった。

知ったのは後日だが、結果はもちろんというかなんというか……

俺らのグループが一位という結果でゲームは終了した。

第十話 歓迎会(2) (後書き)

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0209z/>

Dropbehind

2011年12月15日23時53分発行